



# 農業土木を 支えてきた人々

## 周藤彌兵衛の日吉切通しと新田開発

吉 川 篤 美\*

### I. はじめに

島根県出雲地方は古代日本文化の発祥の地で、往古から中国大陸との交流の関門として栄えていた。それだけに神話や伝説がぎわめて多く、また近年、全国でまれにみる多量の弥生時代の銅剣および銅矛等が出土し、私たちが果てしない神秘と創造の世界へ導き、古代の持つ魅力が私たちをひきつけて離さない。出雲に古代王権が存在したのだろうか。謎は謎を呼び、ひととき古代人のロマンが聞こえてくる。

この地域の開発は、神話で大ロマンとして語られている「国引き伝説」および「八岐の大蛇」に始まるが、文献に残っている開発事業は寛永年間（1624～1643）以降である。先の本誌50巻第1号で、「ト蔵孫三郎の荒島新田の開発」で紹介されたように、出雲地方における開発は多岐にわたり行われ、地域開発の脈動が連綿と続いている。そして今日、「島根農業21世紀への挑戦」として、大規模で先進的な畑作営農が確立され、大市場向け大量流通産品を生産する食糧生産基地の中核の拠点となるべき中海干拓はその完成が期待され、地域開発の大きな夢が実現しようとしている。

出雲地方には、開発に精魂傾けた多くの偉人がおられるが、その中でも兵衛と呼ばれる人たちがいる。

たとえば、出雲市に高瀬川を築き、斐伊川から大社町まで水を引いて砂丘地帯を開拓した大梶七兵衛。

神光寺川を開削し、菱根池を干拓、51町歩の農地を造成した三木与兵衛。

佐陀川を開削、宍道湖沿岸低平地を開発した清原太兵衛。

そして、本編の主人公である日吉の切通しを開削した周藤彌兵衛である。

切通し開削の大事業は実に周藤家四代にわたって続けられ、村を永久に水害から救った。その新田開発の事蹟を紹介する。

### II. 周藤家事蹟

#### 1. 第一期の切通し

周藤家の偉業の跡を伝える現地通称「切通し」は、島根県八束郡八雲村大字日吉で、意宇川の中流に位置している。意宇川は郡内で最も大きな川で、八束、大原、能義三郡の境天狗山を河源として、八雲村熊野の溪谷を貫流し、岩坂地内で平原川、桑並川および東岩坂川と合流して、松江市大草町を流下し、さらに東出雲町出雲郷を経て中海に注いでいる。川長は16 km 余、川幅の広い所は100 m 余もあるが、常時は水量が少なく、夏季はほとんど渇水同様になるが、下流沿岸は美田が開け、古代の意宇郡は出雲における政治的中心地として繁栄した。今でも国庁、国分寺等の遺跡がある。

意宇川は平時は水量はわずかであるが、ひとたび雨期に入り連日の強雨があると濁流が渦巻き、堤防を破壊

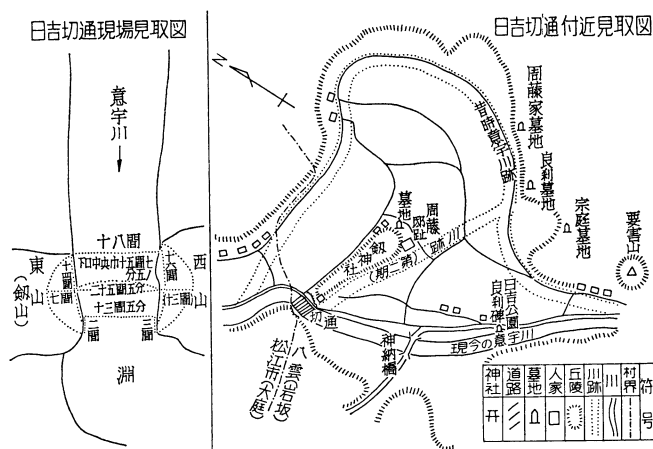


図-1 日吉切通し見取図

\* 葦川地域農村基盤総合整備事業所(きっかわ あつみ)

し、耕地を流失させ沿岸一帯が泥海と化したことが度々であった。なかでも、日吉の地はこの意宇川が地形上大きく曲流する地域に当るので、たびたびにおいて、一村がまさに滅亡に瀕するありさまであった。

周藤家は日吉村に住し、累代彌兵衛を襲称し、意宇郡の下郡役を勤めた旧家であった。初代周藤彌兵衛家正(彌兵衛良利の祖父)は非常に義侠心に富み、常に民衆の福利増進を行うことに努力していたので、岩山切貫川違工事を藩に出願した。しかし、国家老は「願意はさることながら、国費多端の折柄、僅かに百四、五十石に過ぎない小村に対して、かかる不急の工事を起こすは如何に」と反意を表明し、ついに藩主の決裁を仰ぐこととなった。時の藩主松平直政はまれに見る英君であり、経世の偉才であったから、「治国安民は施政の根本である。日吉村の石高は僅少であるが、しかしながら一村の存亡に関することなので、国費多端の理由をもって放棄すべきでない」と申し渡したので、慶安3年に藩の事業として工事を起こし、承応元年まで3カ年間に剣山の一角を中断して、岩山を幅7間開削し、古川に堤防を築いて意宇川の水をこの切通しに落し、古川跡には新田を開いたので、村民はその恩恵に浴するようになった。

しかしながら、間もなく承応3年、洪水のために古川の堤防は破壊され、その新田が流失した。それを復旧しない内に藩主直政が逝去したので、藩費による工事はついに中止となった。そこで、二代弥兵衛(宗固)は自費をもって古川堤防の修復や新田の開作を度々行い、また、切通しの開削も行った。その後、元禄15年の大洪水には、本田、新田ともに跡形もなく破壊し、復旧の望みは全く絶えてしまったのである。

## 2. 第二期の切通し開削と新田開発

元禄15年(1702)には6月と8月に二度も豪雨があった。6月には宍道湖の水が6尺(約182cm)も増水してあふれ、さらに8月には湖水8尺(約242cm)増水し、平地の浸水は5尺から9尺にも及んだといわれる。中海沿岸では、かなりの氾濫があり、松江藩内で男女溺死50人、牛馬16頭、流失家屋4,157戸、作物被害84,294石にも及んだといわれる。

さて、この大洪水は、日吉村に対し全く致命的な被害を与えたのであるが、それにもまして出雲国各地での被害は大きく急を要する地区も多く、国費多端の折、小村の日吉村の復旧工事のごときには手の届かない状態であった。

この時、三代彌兵衛良利(家正の孫)はこの見るも無残な村の荒廃を見るに忍びず、意を決して立ちあがったのである。まず藩費の補助をもって復旧することは、と

うていおぼつかない状態を見、このままでは百年河清を待つに等しいと思い、祖先の遺志を継ぎ村民の福利を増進するためには、家産を投げ出してもやり抜こうと決心したのである。そして、自力で岩山開削、川違工事を実施しようと出願した。宝永3年、実に彌兵衛56歳の時であった。

藩においても彌兵衛の篤志に感じ、家産を投げ出してまでも公益事業を実施するのは、「立派な篤志家で度量の広い者である」として賞銀500匁を贈与し、これを奨励した。

当時一平民で藩からのお誉の言葉をいただくことは最高の光栄であるのに、そのうえ賞銀さえも賜ったので彌兵衛は大そう感激して、岩山開削を一生の仕事とし、もし、成功しなかったならば頭を岩角にぶつけて命を絶とうと心に誓い、酷暑の日中も、厳寒の朝もこれに屈せず、また、休まず自から鉄槌を握って岩山に挑み、まさに24時間の勤労であった。それから2年後、藩の執政が地方巡視の際に日吉村に立寄り工事現場を視察して、その労をねぎらい、褒美として米30俵を贈与されたので彌兵衛はますます感激し、ひたすら努力した。

この切貫工事はすべて岩山である剣山を中断して河身を開くのであるから、その難工事は大変なものであった。今日のように爆薬をもって掘削等の便法がない時代であるからすべて鉄槌の力のみによらねばならぬ。彌兵衛が半生の心血を傾注し、40余年の永きにわたって難工事を継続したことを思えば、誰がその堅忍不拔の精神に感じない者があろうか。そのうえ、一方では堤防を築いて古川跡に新田を開拓したので、その費用の多大なことは想像以上であったろう。けれども自力開削を出願した以上、いかに多大の費用がかかっても村民に夫役を賦課することなく、所有の田畑山林を以ってその費用に充て、一切他力を借りないでその竣功を図ったのは、実にまれな篤行者であるといわなければならない。

こうして、第二期の開削の計画は、岩山幅3間を切り広げ、河底1間を切下げ、古川には高さ3間の堤防を築いて、その跡に新田を開こうとするものであった。しかしながら、古川に3間の堤防を築くのは多大の工費を要し、一個人の事業として短期間の成功は望めないもので、まず3尺石で古川に井越を造ることとした(現在、切通し付近に字石土手と称する所がある)。出水の際には一部の水は切通しに落し、また、一部の水は井越を越えて泥砂を旧川跡に沈積させ新田を開発することとしたので、正徳元年に至って岩山切貫新田開発の工事がようやく完工する運びになった。

しかし、一たん大洪水に遭えば、古川の井越が、なお

も不完全なため新開地の荒廃は目前にあるので、いかなる困難に遭うとも、誓って永久的な工事完成を期せんと意気込んだが、工事のための水量測定に苦心し、また、難工事であったので意外の長年月を要し、工事の着手は宝永3年、竣功は延享4年で、その間なんと42年であった。

さて、新田開発後10カ年間は、物産御免すなわち、無租で11年目から年貢を上納した。古書によると、開発した新田は、石高37余に及んだとある。

なお、切通しは良利の没後、良利の子兵蔵(彌右衛門)が切り広めたもので、現在では切通しの上口幅18間、中央部15間7分、下口幅13間5分、切割長さ東方16間、西方19間、岩山切貫高さ東方直高7間、西方直高13間である。

### III. 兵蔵による開発

良利の子兵蔵は彌右衛門と称し、与頭を勤めた。父祖の偉業を継いで、切通しを現在の広さに掘削し、他の公益事業にも力を尽くした。その事業の主なもの、大庭村新井手建設と出雲郷村島小路新田開発であった。

大庭村大町両堤下の水田は、大草村内の沓形輪、青木輪を合せ13町歩余、山代村の水田7町歩余を加えて合計20町歩余りが用水不足を生じ、そのため一朝にして大町溜池の水が枯れるほどで、年々干ばつの被害を受け、村民の苦悩は相当なものであった。兵蔵はこれを救済しようとして、地形、水利を調査し、日吉の切通しから大庭両堤に至るまでの482間の用水路を開設したのである。

### IV. 周藤家系図について

周藤家は主に雲部の中央地域に分布している。その在住の歴史を見ると、古い家系でだいたい15、16代を経て今日の当主になっている。先の日吉村周藤家の本家であるという家が八東郡東出雲町出雲郷にあり、この家に

系図が大切に保管されているが、その系譜書によると、周藤家はその祖は遠く楠正成の祖父盛氏から出ていると伝えられる。日吉村の周藤家の先祖はこの出雲郷の周藤家より分家したものであるという。日吉の初代周藤彌兵衛家正は51歳の時、出雲郷周藤家より家督を長男惣兵衛に譲り、次男兵衛を連れて日吉に分家したと書かれている。そして、家正その子宗固、孫良利、その子彌右衛門と四代にわたって、慶安3年(1650)から宝暦3年(1753)の永い年月を経て所期の目的を達成したのであった。

### V. おわりに

意字川の日吉の切通し付近の堤防に純白の桜花を見ながら切通しの岩の上に足を止めれば、のみ一丁と槌一丁を頼りに白髪肩を覆う老人がただ無心に岩に挑んでいる姿をほうふつと思ひ浮べることができる。

あの岩山を一人の人間の力で切り開くということ…。なんという偉業であろうか。その雄大さに感嘆すると共に、周藤彌兵衛翁の偉大な業績に心から敬服するのである。

年々歳々襲われる水禍から、人と田と財を救うための抜本的な壮大無類の着想と、これを貫徹させるためにあらゆる困難に耐え、あらゆる障害を乗り越え、あらゆる犠牲を払って実に42年の間、ただ営々と岩山を切り刻んだその精神力、不屈の闘魂、犠牲の精神、それは人間の最も崇高な姿であると思われる。

土木技術に生きた偉人周藤彌兵衛の大事業をたたえると同時に、われわれは“島根農業21世紀への挑戦”を「人、技、土」で果たしたいものと願っています。

#### 引用文献

- 1) 島根県旧藩美蹟：明治45年、島根県内務部刊
- 2) 八東郡誌：昭和48年、奥原福一編、名著出版

[1986. 6. 2. 受稿]

